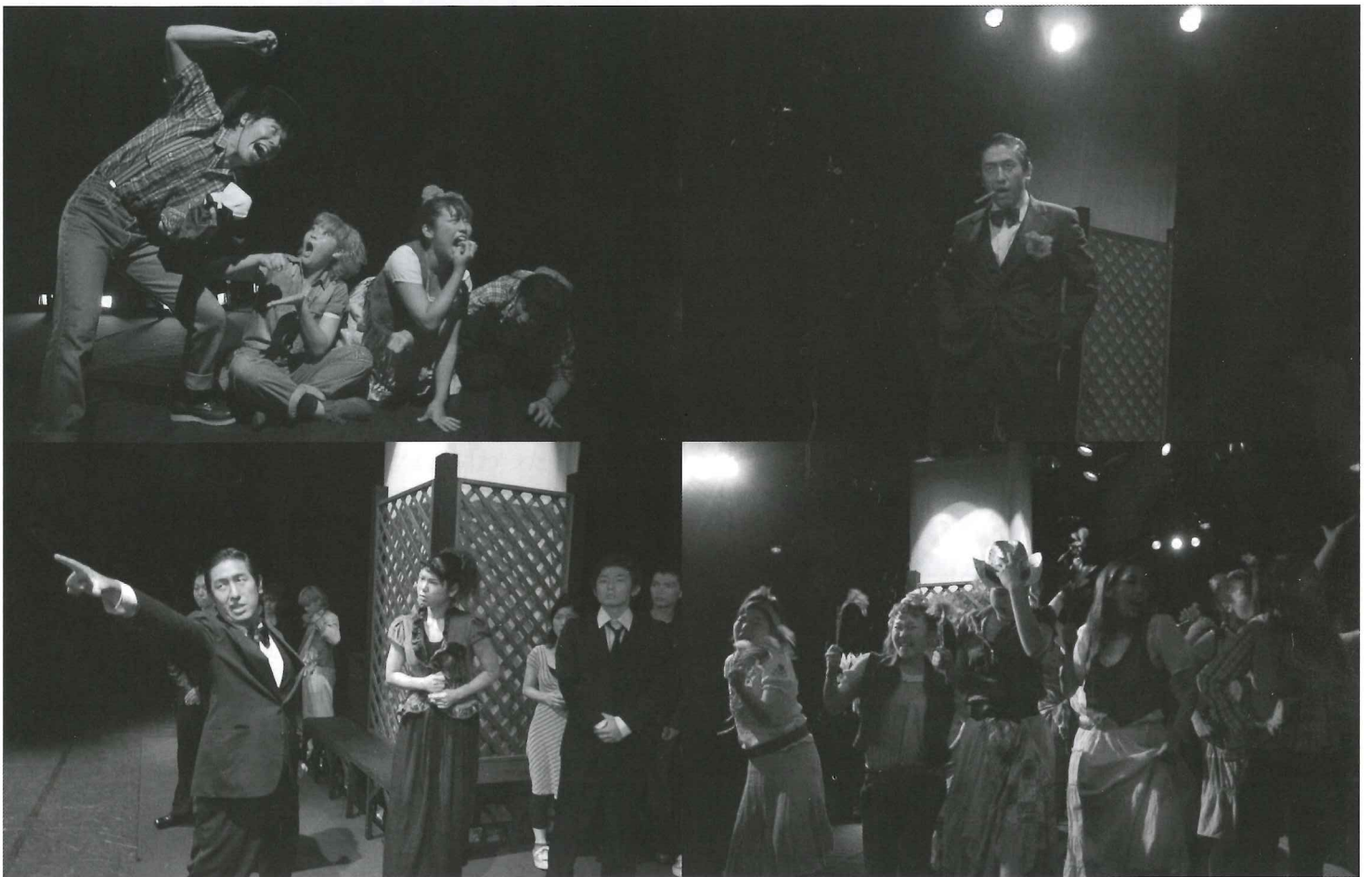


DRAMA かながわ 63

神奈川県演劇連盟事務局：横浜市中区福富町西通り52（横浜演劇研究所内）Tel.045-261-4866

暑い夏に熱い冬物語がやってきた 第2回青少年のための芝居塾!

日時:2011年8月19日(金)～21日(日) 会場:神奈川県立青少年センター 多目的プラザ
「デトロイトウィンターテキサスサマー～シェイクスピア「冬物語」より～」



青少年のための芝居塾を終えて

青少年のための芝居塾は、高校生から29歳までの幅広い青少年が集まり、ともに芝居をつくりあげ、その体験を各学校の演劇部や地域の演劇活動に持ち帰り、活かしていただくという企画です。私は担当劇団である風雲かぼちゃの馬車の団員として参加しましたが、芝居塾への参加自体が初めてでしたので、緊張しつつも期待に胸を弾ませておりました。

5月半ば、性別も年齢もさまざまな塾生が集まり、顔合

わせが行われました。稽古もはじまり、前半にストレッチや筋肉トレーニング、ダンス練習が行われるようになりました。ダンス練習は特に回数を重ねました。夏の暑い気温の中、練習するダンスは2曲。息をきらしながら、一生懸命練習を続ける皆は、本当にキラキラと輝いていました。

6月中旬ごろから台本の読み合わせや立ち稽古も加わり、役について様々なことを考え、話し合いを繰り返すようになりました。7月も後半になると、ダンスも揃うようになり、皆が心から声を出し、体を使い、一つの芝居を創りあげるために、全体が一つになっていくのを感じました。

8月、ついに劇場入りし、本番のセットを用いての稽古がはじまりました。実際のセットですので、今までの稽古には存在しなかった段差や、ぶつかってはいけない物、照明の灯体などがあります。階段の段差で出ハケがうまくいかなかったり、椅子の角に足をぶつけて転びそうになったり、灯体にぶつかりそうになったりしながら、どういう風にすればお客さまから良く見えるようになるのかを皆で考え、稽古をしました。



そしてついに本番がはじまりました。公演前、あわただしく準備が行われる中、楽屋中が緊張と高揚感に満ちていました。その中でも、皆が協力してヘアスタイルをセットしたり化粧をしたりする姿や互

いに声をかけ励まし合う姿は、とても和やかでした。本番は全部で6回ありました。どの公演も皆で力を出し尽くすことができ、たくさんのお客さまに観ていただくことができたのを、大変嬉しく思っています。

私は芝居塾の企画の中で、純粋に楽しむことの大切さや頑張り、団結したパワーやテンションの凄さ、皆で助け合うことの大切さを知りました。息をきらし練習したダンスも、皆で世界観や役のことについてたくさん話し合い、考えたことも貴重な経験でした。今後は、この芝居塾で学んだことを大いに活かして、力強い芝居を創りつづけていきたいと考えています。

最後に、今回の芝居塾で、様々な方と出会い、ともに芝居を創りあげることができたことを、心から幸せに思い感謝いたします。また、芝居塾に参加した塾生の皆さんが、今回の芝居塾で体験した様々なことを、自身が所属している各高等学校の演劇部や地域の演劇活動に持ち帰ってくださることで、今後の地域の芸術文化活動がより活発化することを祈っております。



風雲かぼちゃの馬車：西田恵実



「青少年のための芝居塾を観劇して」

県演連事務局 馬場秀彦

風雲かぼちゃの馬車が芝居塾を担当するのは、今年で3年目である。軽快なテンポに歌・ダンス、加えて照明・音響効果を駆使して芝居塾生の持てる力を最大限に引き上げてきた。今回上演作品「デトロイトウィンターテキサスサマー」原作は、シェイクスピア「冬物語」である。

ご承知のとおり「冬物語」はシェイクスピアの4大喜劇・ロマンス劇（ラテン語を起源に持つ言語及びラテン語の諸方言で書かれた作品）で、王の嫉妬によってもたらされた悲劇が16年後に再生に向かって動き出すという物語である。多目的プラザの空間の中で如何に表現するのだろうか、興味津々の中、幕が開いた。率直に言って「なるほど、こりゃやられたね」という感じだ。観る側にも演じる側（塾生）にも馴染みやすく脚色されている。シチリア王国をなんと全米でも治安の悪さ1、2位にランクされているデトロイト・マフィア一族に、ボヘミアをこれまた人口第2位の南部テキサス、素朴でおおらかなカウボーイ一家に置き換え物語は進行する。プラザ全体を舞台として四方からの

登場は其の時々互いの心の葛藤や届かぬ想いを想像させた。好感が持てたのは、塾生の皆が主役であり脇をがっちり「かぼちゃの馬車」がサポート、塾生それぞれの持てる力が無理なく・無駄なく表現されていて、何より芝居を楽しんで演じている事だ。さて、シェイクスピアの作品の多くには、物語の時の流れを表現するコーラスや歌が、そして物語の進行や時にはチョッとばかりの結末を喋ってしまう「道化」が登場するという物語には欠かすことの出来ないシーン、この「デトロイトテキサス」にも表現されていたと思う。人々のダンスシーン・歌・羊飼いの息子・2匹の羊等々…。心地よい笑いがあり、温もりがあり 1時間半（通常は3～4時間）という短い中にも物語の主旨を損なうことなく仕上がった作品だと実感した。

結びとして、願わくばこれまでの・更にこれからの芝居塾生の皆さんのパワーが演劇連盟に溶け込んでいくことを心から期待したい。

劇団探訪

神奈川には県演連加盟劇団以外にも数多くの劇団があります。芝居を観劇しながら、いろいろな劇団取材をご紹介します。今回は「テアトルフォンテ附属劇団エルブ」です。

テアトルフォンテ附属劇団エルブ旗揚げ公演

取材：関口素実

私が劇団エルブ（以下「エルブ」）のことを語るときに、どこまで客観的になれるだろうか？創立前から多くのメンバーを知っており、さらに私はエルブの創立にも立ち会っている。つまり私にとってエルブは、創立前から応援することが決まっているような劇団なのである。

どこの劇団もそうであるように、突然エルブは誕生したわけではない。テアトルフォンテが「いまあらためて、劇場に必要なのは劇団です」と謳い、2010年初頭に「劇団をつくらう」という講座を開催したのが発端。これは所謂演劇ワークショップとは性格が異なり、演技・スタッフワークだけでなく、劇団運営のノウハウも含めた講座であった。参加者は泉区民ミュージカル参加者が多くを占めた。講師として、県演連より横田理事長と土井宏晃氏、笹浦暢大氏が参加。そして、この講座が実り、2010年6月に劇団創立が実現した。劇団名は「フランス語で草を意味する『エルブ』に、草野球のように身近で誰もが参加できるような『草演劇』、技術的にはプロには遠く及ばなくても本気度はプロと変わらないというような意味が込められた」そうだ（タウンニュースより）。

しかし、創立メンバーは、市民参加型の演劇事業に参加したことはあるが、劇団に所属し運営に関わったという方がほとんどおらず、また、若さゆえの勢いを兼ね備えたとは言いがたく（失礼）、当事者である劇団員の不安を取り除くためには、芝居づくりと劇団運営の面で劇場のフォローが必須と、私は考えていた。しかし、現代表の静稀香那氏に当時のことを聞いてみると、「期待でいっぱいだった。それしかなかった。」という意外な答えが返ってきた。そう、楽しみたいから始める。アマチュア演劇はそうでなければいけないのだ。と書いてしまうと様々な意見もあるだろうが、そう思って心が洗われる気分になったのは事実である。私もかつて劇団に入座したころは、やはり期待に胸を膨らませていたものである。

そんな期待のなか劇団はスタートした。劇場の附属劇団故に、稽古場の確保がしやすいというのは、劇団としては良すぎる条件である。これまでの表立った活動としては、同年9月に川村毅作「新宿八犬伝 第五巻一犬街の夜」(初演)にメンバーが出演。そして11月にフォンテのリハ室にて準備公演として「ばば草物語」を上演。年が明けて、泉区民ミュージカルの後、劇団員の数名メンバーが県演連の合同公演「黒船がやってきた」に客演。新たな交流も生まれた。

そして先日の旗揚げ公演である。講座を受けたものの、劇団を運営していくなかでの苦労はなかっただろうか？静

稀氏によると『ばば草物語』は劇団員だけの小さな公演だったので、誰にも気を使うことなくやり遂げることができたが、代表に就いてからは劇団の意見をまとめるのに苦労したこともある。また、『ばば草〜』で脚本と演出を担当した流れで旗揚げ公演でも演出を担当したが、知らないことが多すぎて(照明・音響・打合せ・広報などだそう)、情けない思いもした」という。きっと今後の糧になるであろう。

そして旗揚げ公演「カノジョ7人冬物語」である。内容は、7人の女性に好意を持たれた売れない役者が主人公。その日は現場でオーディションが行われるなど、役者として売れるチャンスを目前にしながら、なぜかこの日に限って女性たちが次々現れての大騒動、というもの。前半はどのような話か探りながら観ていたが、後半のドタバタの畳み掛けには勢いがあり、気づけば率先して声を出して笑っていた。

役者は12人出演しており、ほぼ全員が舞台に出ているシーンもあり、「立ち位置が悪かったのか」ということではなく、舞台が窮屈に見えた瞬間があった。初演はどことだったのかと調べてみると、大塚の「萬スタジオ」であった。フォンテの舞台より狭いではないか！どう見せたのだろうか？とはいえ逆にエルブの公演ではシーンによっては舞台の広さを感じてしまったのも事実であるが…。

どちらかというといとTV的な脚本だと感じたが、実際、脚本の今石千秋はテレビ・ラジオ等でも活躍中とのこと。エルブもそのあたりは感じていたようで、その点を舞台向けに修正する演出の作業は行われていたのだろうか？

今回の照明・音響にはアイコンクスがついており、また会場ロビーでは、会場スタッフやサポーターが受付や会場整理を担当していた。エルブが多くの方々に支えられており、「地域劇団はかくあるべき」と感じた公演であった。劇団員は現在8名。今後は劇団員を増やし、年に1回ペースでのホール公演のほか、小公演なども積極的に行っていきたいとのこと。「劇場附属」という珍しい形態の劇団なので、県演連に加盟していただけることを期待している。



旗揚げ公演～カノジョ7人冬物語～
2011年9月17日(土)～18日(日) テアトルフォンテ

濱田重行 × 城谷護

神奈川県演劇連盟合同公演「皇國ノ訓導タチ」

2011年12月に行われる神奈川県演劇連盟の合同公演は京浜協同劇団（以下：京浜）とよこはま壱座（以下：壱座）によって行われる。え？京浜と壱座がタッグを組む？これは、どんな芝居を作るのだ！どんな作品を演るのだ！ということでドラマ神奈川は合同公演の稽古場である京浜の稽古場へ！そこでは京浜と壱座の劇団員が勢揃いし本読みを行っていた。（その取材に行ったのだから揃っているのが当たり前なのだが…）演出の濱田重行氏からは様々な感情の表現が要求され、それに応えようと役者が創意工夫し台詞を発していく姿が印象的だ。さて、今回の合同公演の演目は「皇國ノ訓導タチ」若い世代の人間にはなじみのない本ではあるが、京浜と壱座が演る芝居なのだから何か大きなテーマがあるということが窺える。とはいうもののいったいどんな芝居なのか…。一人で考えても分からないので、壱座の濱田氏と京浜の城谷氏に取材を行った。

—— 「皇國ノ訓導タチ」という芝居は一体どの様な芝居なのでしょう？

濱田 重いし、暗い。「これをやりたい！」と思う気持ちがなかなか湧き上がらない芝居。脚本を読んでも分からないでしょうね。（笑）

城谷 でもそれを芝居として見せることで、今の世の中でも希望を見出すというかね、勇気を与える作品だと思います。

濱田 そうだね。当時の人たちが何を想い、何を感じていたのか、どうやって戦争が始まり、それが何故行われていったのか、というのを色々な人に気づいてもらいたい。それを気付かせる力がある作品だね。

城谷 今の人たちはみんな興味がない。無関心が多いよね。見えないところで一体何が行われているのか。確かにそれはニュースになっているわけでもなく、知らされていないのだからしょうがないのかもしれないけど。

濱田 でもそれを知ることが我々のなすべきことだと思うのですよ。



濱田 重行

劇団寄せ合つめを旗上げ後、友好劇団であった、創芸、青年座と合併し三劇団の頭文字である、「創青寄」から「蒼生樹」を設立し県演連に加盟。一昨年、蒼生樹を解散し劇団よこはま壱座を旗上げ、同劇団の座長。

—— 何故「皇國ノ訓導タチ」に決まったのですか？

濱田 実は、急浮上してきた作品なのですよ。

城谷 そうだね。ちゃんと時間を作って色々話してからだよ。井上ひさしさんの「雨」、それから「藪原検校」が候補に挙がっていて、でも、なんかしっくりこなかった。

濱田 私の想いとしては、最初、京浜を巻き込んだ髻物をやりたいと思っていたのだけどね。（笑）面白いかなと思って、随分それを模索していたのだけど、この作品が出てきた時にこれだって思ったね。

—— どうやって急浮上してきたのですか？

濱田 俺が言い出した。（笑）

京浜でもやりたいものはあったけど、やっぱり長いのではないかと、気持はわかるけれども表現できるか？といった懸念はあったよね？

城谷 うん、うん。あったね。

濱田 でも、やっぱりこれしかないと思ったよね。それは何故か。今年の3月1日に起きた東日本大震災が大きな要因だね。あの光景が戦時中の情景を思い起こしたのだよ。それに何と言っても原発だよ。原発に関する情報の出し方が、まるで大本営発表みたいだね。海上ではドンドン日本の軍艦が撃沈されている、でも国民には伝えられない中で、軍としての発表は「日本は勝っているぞ」という、あれと極似しているなって。

城谷 ものすごくオーバーラップするのですよね。僕は震災後の東北に五、六回入ったのだけど、そこで感じたのは、誰かが言った「死の町」じゃないのよ。僕は同じ景色

を見て、瓦礫の中で人間が生きようとしているのを見てきた。立ち上がろうとする姿を見てきたのよ。その立ち上がろうとしている姿を僕はこの作品に見るわけよ。苦しくても生きようとする人間をね。

濱田 そう、だからこの作品を「今」やろうと思ったんだよ。

—— 今回、京浜と壺座で何故合同公演を一緒にやろうと思ったのでしょうか？

濱田 京浜とやりたい、っていうのは随分前からあったのだよ。

城谷 そうなのよ。

濱田 役者は男も爺もいっぱいいるしその辺で、意味のある重さというものを感じていて、一緒にやりたいっていうのはあったんだけど、なかなかそれを実現できなかった。それは京浜の都合もあるし、こっちの都合もあるし。やっどよね、このところで合同公演という一つのいい兆しが出てきたから、じゃあどうだって持ちかけたの。元々は僕が京浜に役者として出てからだから、何年越しだ？

城谷 「ジョー・ヒル」は87年だから24年だね。

濱田 もうそんなになっちゃった？随分時間かかったね。

一同) 笑

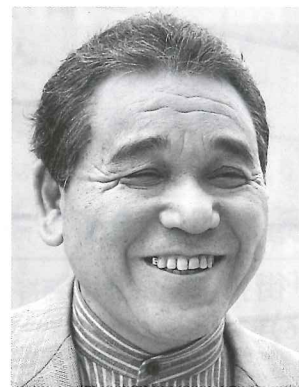
—— 最後になりますが、今回の合同公演で伝えたいことは何でしょうか？

城谷 県の合同公演に、一石を投じる芝居になると思うのだよ。今までどこか1つの劇団がやろうということになって、それをサポートするようなスタイルだったけど、今回の場合は「これをやっていこう」という意思統一がお互いの劇団の中で出来ている。本当の意味での合同公演が出来るのじゃないかな。

濱田 「悲劇を喜劇に」したい。戦争というものは思い込みの上に成り立っている。なぜそういう風に思い込めたかというのは、先生たちがその気になって子供たちを教えるからだよ。絶対さ「いや違うぞ、神武天皇が最初にこの国を作ったわけじゃないぞ」と言うことなんか、そんなこと分かっているのに、トンツとその気になっちゃう、その

城谷 護

京浜協同劇団元代表。主に制作を担当。劇団歴51年。プロの腹話術師としても活動。全日本リアリズム演劇会議事務局長。川崎市社会教育委員。川崎文化会議議長。



気になっちゃう先生たちが、子供たちをその気になって作るものだから、子供たちもその気になっちゃう。そこが、まさしく喜劇なのですね。

インタビュー後記

多くの人がこの芝居を見終わった後に「救いがない」と思うかもしれない。しかし、この本は現実の中から現実を抜き出し描かれたフィクションである。世の中には救いの無い出来事なんて数多くあるものなのだから、その現実を目を逸らすことなく向き合い、それについて何かを考え、感じる事が出来ればまだまだ僕たちは一生懸命生きていくことができる。この対談が終わった後、城谷氏はこう言った。「このインタビューこの芝居の面白さを伝えるのには完ぺきだったね。」いやいや、この芝居を観ることでこの原稿は完成するのだ。なんていってみたい…

神奈川県演劇連盟 京浜協同劇団 劇団よこはま壺座 合同公演「皇國ノ訓導タチ」観るしかないでしょ。

インタビュー、文：劇団よこはま壺座 海老名信吾

神奈川県演劇連盟合同公演
京浜協同劇団+劇団よこはま壺座
「皇國ノ訓導タチ」—大君ノ邊ニコソ死ナメ—
作：なかの・ひろし 演出：濱田 重行

日程：12月16日(金)～18日(日)
会場：神奈川県青少年センターホール (JR桜木町駅より徒歩10分)
問合せ：京浜協同劇団
TEL：044-511-4951 FAX：044-533-6694
メール：keihinkyoudougekidan@nifty.com
劇団よこはま壺座
TEL：090-8175-3031 FAX：045-751-3605
メール：info@yokohama1za.jp

神奈川県立青少年センター・演劇資料室を御利用下さい

演劇資料室では、外国や日本の戯曲をはじめ演劇雑誌等多くの演劇図書を取り揃えており、戯曲などの無料貸出もしています。御利用は一回3冊まで2週間借りられます。また神奈川県内のアマチュア劇団の活動記録等もごございますので大いに御活用下さい。皆さまのお越しをお待ちしております。

神奈川県立青少年センター 2階 演劇資料室 〒220-0044 横浜市西区紅葉ヶ丘9-1 ☎045-263-4400 (代) 内線5301

僕らの演劇

第3回川崎インキュベーター合同公演

「街挿話」 作:伊藤裕一 演出:笹浦暢大

6月29日~7月3日 於:ラゾーナ川崎プラザソル

まず、全体を通して痛快で非常に分かりやすく、どんな層の観客が見ても楽しめる作品だったと感じる。話の舞台が、多くの人に馴染みのある『商店街』であり、登場するキャラクターがその商店街の様々な店員や職員であった。それは、合同公演として多くのところから集った個性豊かな役者の個性をさらに引き立てていたようで、役者一人ひとりが生き生きして芝居をしている姿を作り、同時に劇中の関係性に活かされていたように思える。

その中でも、その道(いわゆる、極道)の人たちが登場するのだが、そこもリアルに怖さを演出するのではなく、コミカルに笑いを交える姿は悪役でありながらどこか親しみのもてる存在であった。

また、舞台の基本的な構造はシンプルなような印象を受けたが、看板が切り替わることで、多くの道具を必要とせずその場が出来上がっていた。シーンが失速せずに転換していくことでテンポも非常に良かったという印象がある。観劇した際に、小さなお子様も観ていたのだがのめり込むように観劇していたので、そういった展開方法が有効であったように思える。



本当に多くの人が見て、分かり、楽しめる作品であり、今のこの世の中だからこそ深く伝わる、自分たちの生まれた場所・育った場所を守りたい。人と人とが助け合う。ありきたりかもしれないが、そんな深く伝わるメッセージが込められているものであった。

風雲かぼちゃの馬車:米澤良樹

劇団葡萄座

「魂取り立て屋・願い叶えます!」

作:一瀬たけね 演出:山本伸二

7月9日~10日 於:泉区民文化センター テアトルフォンテ

客席の照明が暗くなり、緞帳に描かれた幾何学模様の残像だけがしばらく闇に浮かぶ。そしてその残像が消えたころ、舞台の上にこの世とは思えない風景が忽然と現れる。こうして、葡萄座第154回公演が始まった。

人間の魂を集めるために、夢を叶える為の代償として魂を頂くという作戦を考え出した悪魔の弟子と師匠。その2人の悪魔に翻弄される人間達は、やがて悪魔の力を借りずとも夢を叶えられる事に気付いていき、最後は天使まで登場

しての2転3転する結末。そんな物語が、よく練られた脚本と安定感のある役者さん達によって、軽快でコミカルに展開され、最後まで見入ってしまう見事な作品だった。

しかし、あれだけ「笑わせる仕掛け」を連投していたにもかかわらず、最初から最後まで客席から笑い声が聞かれることは無かった。その要因のひとつが、あまりにも少なすぎる観客数にあると思う。これだけ実力を持った役者さん達と、照明・音響・舞台美術スタッフを揃えた作品なのに、客席数の半分にも満たない観客動員数では、あまりにも寂しいし勿体ないと感じた次第である。ぜひとも次回公演時には、満席の会場に伝統ある葡萄座の実力を見せつけて頂きたい。そう願うばかりである。



劇団「横綱チュチュ」:伊藤俊之

劇団よこはま壺座

「本番10分前!~やるの?やらないの?~」

作:三木直史 演出:濱田重行

7月15日~17日 於:磯子区民文化センター 杉田劇場

7月17日14時。杉田劇場での「劇団よこはま壺座」の公演を拝見させていただきました。

『本番10分前!~やるの?やらないの?~』という題名の芝居に、どんな話なのだろうと胸が弾みました。

幕が開くとそこは私達が慣れ親しむ、そして愛してやまない舞台の袖が…舞台。という設定で舞台装置が堂々と後ろ向きで組み立てられ、雪は右奥に降り、中央右脇には照明が立っている、テーブルの上には、芝居で使うであろう小道具が置いてある、何に使うのかわからない…何が出てくるのかわからないおもちゃ箱のような舞台でした。

その舞台装置を見ただけでも、なんだか親近感を感じて、袖から役者を見ているシーンなど『そうそう、そんな感じでみんな見ているよねー』と一人で心の中でつぶやいてしまいました。

さて、話は劇団の公演本番直前、主演女優の足の骨折というアクシデントに始まります。その後も次から次へと、様々なアクシデントに見舞われながらも、舞台監督とその助手が台本変更、役者の調達などをして、芝居を進行させていくのですが、最後には役者や劇団を応援してくれる人、座長の妻など劇団に関わる人みんなが、心を一つに合わせ、舞台を無事成功させるためにとにかく皆の力を合わせ、上演を成功させるというシチュエーションコメディで、素直に笑ってしまいました。笑うだけではなく、最後には心に

温かさを感じさせられる芝居でありました。

同じ時間で同じ空間にあるのに舞台と袖では全然違うドラマが繰り広げられているという作者の視点もとても面白かったです。

役者さんたちも、一人一人に力があり、自然にそれぞれのキャラクターを演じていらっしやいましたし、魅せてもらいました。壺座の役者層の厚さ、演技の質の高さを改めて感じました。でも、もう少しハチャメチャしてもよかったかも。…好みですが。しかし、これからも色々としみやかな劇団であると感じました。良い芝居をありがとうございました。



劇団麦の会：新谷美智子

かわさき演劇まつり

「カモメに飛ぶことを教えた猫」

原作:ルイス・セプルベダ 作・演出:板倉哲

7月23日～24日 於:川崎市多摩市民館 大ホール

「かわさき演劇まつり」は、市内アマチュア劇団育成と、市民により良い演劇を届けることを目的として、隔年ごとに公演と演劇講座を行っている企画、とのこと。本年は演劇公演の年にあたり、選ばれたのはルイス・セプルベダ原作、“8才から88才までの若者のための小説”とうたわれる本作である。

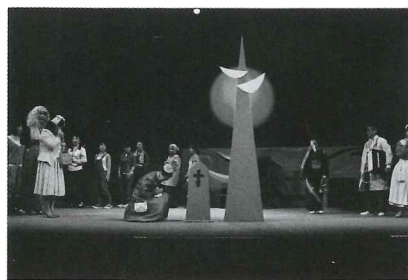
“大人から子どもまで”…子どもにも理解でき、大人の鑑賞にも耐えられる、という作品を目指すとき、難しいのはその両立である。また、企画の性質上、劇団所属の役者と一般公募の市民が参加という、演劇スキルの混在する現場での、作品としての“まとまり”をどうするのか、という課題もあるだろう。

結論から言ってしまうと、それらの課題を気にせず観れるほど、バランスのとれた舞台だった。

それは、演出・役者の技術の賜物であるに違いないのだが、作品が背負うメッセージを無駄なく無理なく観る者に伝えていく、脚本の力が大きかったように思う。

港町に住む猫・ゾルバは、ある日、瀕死のカモメに卵を託される。卵を育み、ヒナが育ったら飛ぶことを教えてほしい、との願いを、ゾルバは引き受け約束をしてしまう。そこから、ゾルバと港町に住む猫の仲間たちは、約束を果たすべく奔走するのだが…。

カモメが猫に頼みごとをするというのも、猫がそれを守り続けるのも、奇想天外な設定に当初思えたが、役者の立ち振る舞いや脚本から感じる、同じ命あるものとして誇りと痛みを持って生きている同士と考えれば、不自然なことと感



じられなくなってくる。

猫は約束を守るために、仲間と力を合わせ、ときに迷走するが新たな考えを得て、根気よく問題を解決していく。その過程を、観るものが子どもであれば、自らのこれからの勇気とするであろうし、大人であれば、日常を振り返り、心にある価値観をチェックするだろう。ちいさき生命たちが真実を唱えるからまた、心に響いてくるものがあった。

これが心もとない舞台であれば、あらかじめ読んでいたチラシのリード文を思い起こし、頼りながら観ていくところだが、そう斜に構えずに素直に楽しめた点が、この舞台の総合的なバランスの良さだったと思う。

ラゾーナ川崎プラザソル：薄田菜々子

劇団河童座&風雲かぼちゃの馬車合同公演

「あらしのよるに」 原作:きむらゆういち 演出:土井宏晃

7月30日～31日 於:相鉄本多劇場

風雲かぼちゃの馬車&劇団河童座の夏の家庭劇場と銘打った公演を観に25周年記念を迎える相鉄本多劇場に行ってきました。

この物語は、作・きむらゆういちさんの累計300

万部を突破するロングセラーシリーズの絵本だそうです。映画化にもなっている物語のようですが、恥ずかしながら私はこの「あらしのよるに」と言う物語を知りませんでした。観る前は、絵本が原作と言うことでお子様向けかと思っていました。ですが、知らないから余計に、どうなるの!!ってハラハラさせられました。

公演を観た後で映画の「あらしのよるに」の予告編を見てヤギのメイちゃんが男だと言うことを知りました。風雲かぼちゃの馬車の土井氏が演出で、あえて女の子にしたのか、実は男か女か分からない感じにしたのかは定かではないが、メイちゃんが女の子で良かった。メイちゃん役の村井彩子は客演のようですが、純朴な感じがとても好演でした。衣装もヤギとオオカミの2種類だけではなく、それぞれが違って個々のキャラクターに合わせて工夫されていて良かったです。テンポも良く、歌ありダンスありで役者さんが動く走る踊るでパワフル!舞台は形の異なる台がいくつかあり、それを巧みに動かして山や谷に見せてくれていました。

クライマックスは、オオカミとヤギの禁断の友情(愛情)に心打たれてしまいました。メイを女の子で観ていた私は動物界の「ロミオとジュリエット」だと思い、「あらしのよるに」に出会わなければ」と叫ぶ切なさに涙しました。原作のラストがどんな終わりなのか、芝居と同じでいつまでも仲良くハッピーエンドなのか分かりませんが、結末が分からないラストで観客の想像に任せるかたちで終わっても良かったなという気もしました。「子どももおとなも楽しめる、心温まるストーリー」本当に良い舞台でした。

演劇プロデュース『螺旋階段』: 田代真佐美

まりこ☆みゅーじあむ

「あらしのよるに」 作:きむらゆういち 演出:川井眞理子
8月20日 於:相鉄本多劇場

会場に入る前から、とつとつことん、とつとことん…

何やら音が流れてくる。団員の笑顔とパーカッションのリズムでお出迎えた。そこは、いつもの本多劇場となんだか違う雰囲気。舞台上だけでなく、客席の



まわりもアースカラーの布で覆われ、大きくとった栈敷席は、ふかふかでふわふわ！まるで、森の中にポコッとあらわれた原っぱのよう。やがてパーカッションに歌が重なり、開演。しかし「あらしのよるに」はまだ始まらない。テーマに「創って観よう！」とあるとおり、これからみんなで最後の仕上げをするらしい。木に葉っぱをつけたり、裸んぼのオオカミとヤギの人形に、ふわふわの綿毛をはりつけたり、廃材でマラカスを作ったり…。舞台上上がった子供たちは、もう、夢中である。

舞台が完成すると、いよいよ朗読劇「あらしのよるに」のはじまりはじまり…。さてここで、入場するときに配られた、青いリボンの出番。「ひゅーひゅーひゅー」…風が吹くと、青いリボンをはためかす。大きな風、小さな風…子供たちはすっかり風になりきっている。手作りのマラカスも、おはなしにあわせていつでも鳴らして良いことになっているので、雷にあわせてガラガラ～！子供たちも作り手であり、演じ手なのだ。最初は後ろのほうで母親の手を離さなかった子供たちも、いつの間にか最前列で舞台にくぎ付けになっている。

徹底して子供目線でつくられた世界。だが大人もじゅうぶん楽しめる朗読劇だった。オオカミのガブと、ヤギのメイが、合言葉「あらしのよるに」と言うときの、あの期待と不安の入り混じったドキドキ。「ひみつのともだち」と言うときの、嬉しすぎてくすぐったくなる感じ。そんな感情が自分にも沸き起こり、語り手（作り手）が言葉をいかに大切に扱っているか、伝わってきた。小さいお子さんやお孫さんをお持ちのかた、ぜひ一緒に足を運んでみてほしい。

劇団「横綱チュチュ」：大西智絵

劇団やぶさか

「七つの海」作・演出:海老原あい
8月27日～28日 於:ラゾーナ川崎プラザソル

「昔、その昔…」から始まる七つの海は予備知識無しに観劇することも可能だろうが、100倍楽しく観る方法としてプロログの内容をしっかり頭に叩き込んでおくことが最重要項目となる。これは作・演出の海老原あいの世界観が非常に深いところとというか、遠い世界に行っているのが気軽に足を踏み込んでしまうと迷いの森を彷徨う事になる。

七つの海は「冒険浪漫譚」です！と、ズバッと一言で説明するのは簡単だが、実際2時間でまとめあげるのには非常に大変な作業であったのではないだろうか。主となる話を軸に4人の主人公軍団にそれぞれサブストーリーが存在し、また、敵対する軍団にもそれぞれサブストーリーがリンクして、ウカヤという白蛇の精を中心に全てのストーリーを完結させる。その全てには愛のためにという純粋な想いがあって、実は“敵”と記したが悪は存在しない。この膨大な量を表現するために舞台を様々な形に



展開させ19人というキャストを使い分けて見事に演じ上げた。そこに大きな拍手を送りたい。また、「横浜の宝塚」を自称する劇団やぶさかは女性が男性役を演じる。女性が男性役を演じる芝居はあまり好きではないのだが、あれも女性、これも女性、それも女性、だけどいっぱい男役。こうなってくると超美形男子なんだと腹括り、男があんなことしたら下品だけど、もう全部美形男子だから許してしまうし、抱き合っても愛を語ってみても綺麗に見えるから、どんどんかましてくれと・・・、何か違う観かたを楽しむようになり、劇団の個性は十分に堪能できました。

今まで築き上げてきたことを全てそこに集約するように一気に解き放つ、ラスト15分の怒涛のように押し寄せる気持ちのいい展開。ウカヤが最後、“死”の意味を知るシーンは無知な純粋さが心地よかった。ま、男としてウカヤは大嫌いですけど。“運命の輪”の導きで観劇した舞台、次回の導きはどんなステージなのか期待している。

演劇プロデュース『螺旋階段』：緑慎一郎

編集後記

今回のDRAMAかながわではいくつかの特集を組みましたが、いかがでしたでしょうか？それぞれの芝居にかける情熱や表現者としての想いが伝わってくる内容だったかと思います。取材にご協力いただいた皆様、寄稿して下さった皆様、ありがとうございました。私たちもその想いを読者の皆さんに伝え、少しでも演劇をもっと身近なものとしていただきたいという気持ちでこれからも取材・編集をしていきます。取材に伺う際には、劇団関係者の皆様、温かく迎えていただければ幸いです。

DRAMAかながわは、劇団に所属している方、フリーの方、演劇鑑賞が趣味の方など、より多くの方に楽しんでいただける内容を目指しています。読者の皆様方からご意見・ご感想などありましたら、お気軽にお寄せください。そして今、季節は芸術の秋♪ということで様々な作品が上演される予定です。次号は冬になってしまいますが、多くの劇評を掲載予定です。もちろんそれだけではありませんので楽しみに！

編集部：浅水真子

お詫びと訂正：ドラマかながわ62号8ページ目34行目において「劇団相互の親睦が図られた。」との一文が入っておりますが、編集時のミスで入ってしまった一文です。お詫びして訂正いたします。

神奈川県演劇連盟加盟団体の記録(50音順)

- 演劇プロデュース『螺旋階段』● 京浜協同劇団● 劇団蒼い群● 劇団河童座● 劇団かに座● 劇団川崎演劇塾
- 劇団こゆるぎ座● 劇団葡萄座● 劇団麦の会● 劇団やぶさか● 劇団横綱チュチュ● 劇団よこはま壱座● 風雲かぼちゃの馬車
- まりこ☆みゅーじあむ● 横須賀市民劇場プロジェクト● 横浜小劇場● ラゾーナ川崎プラザソル● G/9-Project

神奈川県演劇連盟HP：<http://kenenren.web.infoseek.co.jp/2003/> 演劇資料室HP：<http://kenenren.web.infoseek.co.jp/shiryoushitsu/>

DRAMAかながわ[第63号] 発行日:2011年10月1日
編集:緑慎一郎(演劇プロデュース『螺旋階段』)・浅水真子(劇団や

ぶさか)・海老名信吾(劇団よこはま壱座)・関口素実・山元洋一(外部協力)